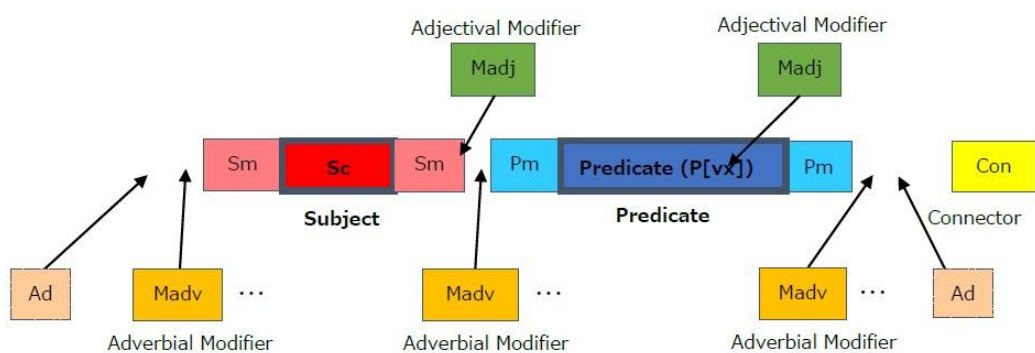


心と言葉のグローバル英語文法 入門

成瀬由紀雄

英語センテンス構造 全体図



目次

はじめに	4
【要約】	4
【Part 1】	5
英語センテンスの構造	6
【要約】	6
センテンスの構成要素——Subject、Predicate、Modifier、Connector	6
Subject	8
Predicate	9
Modifier	9
Connector	10
【演習問題】	11
センテンスパターン（文型）	14
【要約】	14
基本 2 文型プラス派生 3 文型	15
S+P(VO)	15
S+P(VC)	16
S+P(V)、S+P(VOO)、S+P(VOC)	17
【演習問題】	18
「言葉のかたち」としての Words（語）、Phrase（句）、Clause（節）	20
【要約】	20

はじめに

【要約】

- 学校英文法を詳しく理解することが英語の文法を学ぶことだと一般的には考えられている。その考え方は英語ライティングという観点からみればまったく正しくない。学校英文法を理解したからといってそれがそのまま英語ライティングの上達につながるわけではない。
- 英語を書くうえで文法学習は必要ないのかといえばそんなことはない。英語ノンネイティブが英語できちんとした文章を書こうとすれば英語の思考方法と表現方法を理論のうえからも理解しておかなければならない。
- 合理的かつ効率的に英語ライティングをマスターしようとするならば最初から正しい理論のもとで正しいトレーニングをしたほうがよい。その「正しい理論による合理的なトレーニング」の基礎が日本人の英語ライティングのための「心と言葉のグローバル英語文法」である。

☆☆☆

多くの人にとって「英文法」と聞いてまず思い浮かべるのは、おそらく「学校英文法」でしょう。具体的には5文型や主語、動詞、関係代名詞、過去形、受動態といった文法項目のことであり、これらの文法項目を詳しく理解することが英語の文法を学ぶことだと一般的には考えられているからです。

しかしこの考え方は英語ライティングという観点からみればまったく正しくありません。学校英文法を理解したからといってそれがそのまま英語ライティングの上達につながるわけではないからです。実際のところ、学校英文法には非常に詳しくとも英文はまともに書けない英語学習者が非常に数多くいます。従来の学校英文法をマスターすることと英語ライティングをマスターすることとはまったく別ものです。

では英語を書くうえで文法学習は必要ないのかといえば、そんなことはありません。私たちのような英語ノンネイティブが英語できちんとした文章を書こうとすれば英語の思考方法と表現方法を理論のうえからも理解しておかなければなりません。

我流で英語が書けるようになるには膨大な時間がかかります。合理的でも効率的でもないでしょう。合理的かつ効率的に英語ライティングをマスターしようとするならば最初から正しい理論のもとで正しいトレーニングをしたほうがよいのは当然です。その「正しい理論による合理的なトレーニング」の基礎が心と言葉のグローバル英語文法」です。

本書の解説を読み演習問題をこなせば、英語ライティング文法の基礎づくりは完了です。その基礎をもとにして、まず英語で世界に向けてどんどん発信をしていきましょう。それがあなたの英語力をさらに向上させていくはずです。

成瀬由紀雄

【Part 1】

英語センテンスの構造

【要約】

- 英語を理解して表現するために必要なセンテンスの構成要素は Subject（主部/主語）、Predicate（述部/述語）、Modifier（モディファイアー）、Connector（連結語句）の4つであり、それ以外にはない。
- 英文で何かを表現をするということは、この4つの構成要素をつくりだして、規則やパターンにあわせて順番に並べていくことにほかならない。
- 過去形、受動態、関係代名詞節の用法などといった文法項目は、すべて枝葉の知識にすぎない。
- ところが Subject、Predicate、Modifier、Connector が英語学習における根幹的要素であるという事実を知っている日本人英語学習者の数が驚くほどに少ない。これが日本の英語教育の最大の欠点のひとつである。
- Subject（主部/主語）は英語センテンスの王様であり、Subject がセンテンスのすべてを支配する。ゆえに英語のセンテンスをつくる際に第一に考えるべきことは Subject を何にするかである。
- Subject は主「語」（word）でなく主「部」（part）であるから、語だけでなく、さまざまなかたちをとる。
- Predicate（述部/述語）は Subject とペアを組むメインパートナーであり、Subject と Predicate が揃ってはじめて英語のセンテンスが成り立つ。
- Modifier（修飾部/補足部）は「補足情報」を示すものである。
- Connector（接続部）は、ふたつの「思考のまとまりのあいだの関係性」を示すものである。

☆☆☆

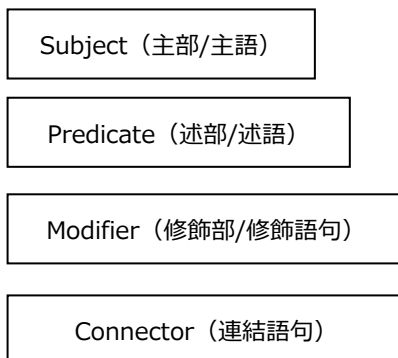
センテンスの構成要素——Subject、Predicate、Modifier、Connector

英語を理解して英語で表現するために必要なセンテンスの構成要素とはなんでしょうか。

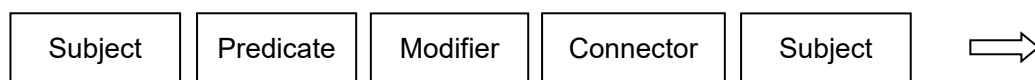
それは Subject（主部/主語）、Predicate（述部または述語）、Modifier（修飾部または修飾語句）、Connector（連結語句）の4つです¹。そしてそれ以外にはありません。

1 なお本論では、Subject、Predicate、Modifier を原文のまま表記することを基本とし、日本語にする場合には Subject に「主部」、Predicate に「述部」、Modifier に「修飾部」という訳語をおもに使うことにする。ただし、世間一般では「主語」「述語」「修飾語句」という訳語が用いられているので、そうした訳語を敢えて用いる場合もある。

英語センテンスの4要素



英文で何かを表現をするということは、この4つの構成要素をつくりだして、規則やパターンにあわせて順番に並べていくことにほかなりません。



Subject、Predicate、Modifier、Connector という4つの構成要素のさまざまなかたちをうまくつくりだせること、つくりだした要素をうまく並べることができること——これこそが英語における本当の意味での文法力であり表現力です。

このことは英語を学ぶうえでのまさに根幹的な知識です。なぜならこの知識さえ持っていれば、その他の知識をたとえ持っていなくとも、英語を理解でき英語で表現することができるからです。

それに対して過去形、受動態、関係代名詞節の用法などといった文法項目は、すべて枝葉の知識にすぎません。

Subject、Predicate、Modifier、Connector という4つの構成要素を理解して運用することは英語を習得するうえでそれほどまでに重要な知識です。ところが Subject、Predicate、Modifier、Connector という4つが英語学習における根幹的要素であるという事実を知っている日本人英語学習者の数が驚くほどに少ないのです。動詞や目的語という文法用語は知っていても Predicate（述部/述語）という用語は聞いたことがないという英語学習者も数多くいます。これが日本の英語教育の現状であり、最大の欠点のひとつです。

もういちど繰り返しますが、Subject、Predicate、Modifier、Connector という4つの構成要素を理解して運用することさえできれば、英語は書けます。そして話せます。本論ではそのほかにも数多くの文法概念をご紹介しますが、それらは英語を書くうえでの根幹ではなく枝葉です。まず根幹である Subject、Predicate、Modifier、Connector を深く理解し、それらを適確かつ自由に使いこなせるよ

うにしましょう。そのことこそが英語ライティングのツボ中のツボです。

Subject

ここからは Subject、Predicate、Modifier、Connector についてひとつずつ解説していきます。

Subject（主部/主語）は英語センテンスの王様です。Subject がセンテンスのすべてを支配するからです。ゆえに英語のセンテンスをつくる際に第一に考えるべきことは Subject を何にするかです。

Subject が決まってこそ Predicate も Modifier も決まるからです。

英語での会話で Subject に最もよく用いられる語は I です。英語の会話を聞いていると[ai]という音が驚くほど数多く耳に入ってきます。I を用いないで英語で会話することは不可能といって過言ではありません。そのほかに Subject としてよく用いられる語に you があります。I や you について語り合うのが英語での会話というものです。

しかしこれが書き言葉となると様相が一変します。Subject には I や you だけではなく、もっと一般的なことがらを表す表現が数多く使われるようになります。行政文書、法律文書、学術文書といった文章になると I や you は Subject にほとんど用いられなくなります。I や you を Subject として用いるかどうかは英語の「話し言葉」「書き言葉」を決めるひとつの判断基準といえます。

Subject は主「語」（word）ではなく主「部」（part）ですから、単一の語だけでなく、さまざまなかたちをとることができます。次のようなものです。

1. I am studying how to write in English.
2. Writing in English is definitely interesting.
3. The presence of abnormally high levels of calcium in the urine horrified me.
4. That organization can benefit from disciplines is not a totally new idea.
5. What the government should do to stop global warming was widely discussed.
6. It is hard for me to contemplate a list like this one and not feel that these maladies still afflict most organizations today and that it will take generations, not years, to change such deeply embedded beliefs and behaviors.²

日本語の場合には「言葉の機能」と「言葉のかたち」が一体化しているので日本語の「動詞」は「～する」というかたちを必ずとります。しかし英語の「動詞」のかたちは決まっていません。water という「言葉のか

2 このように長い Subject についてはセンテンスの後ろに位置替えをして空いた文頭に Formal Subject（形式主語）として It を置くのが一般的である。最初からとても長い Subject を置かれてしまえば読み手のほうが理解できなくなってしまうからである。

たち」は名詞にも使えますが動詞にも使えるのです。よって、英語の Subject、Predicate、Modifier、Connector は「言葉のかたち」としてはどんなものでもかまいません。それらは基本的に言葉の「かたち」ではなく、センテンス内で配置される「位置」で決まります。

たとえば日本語の場合には、「太郎が英語を勉強する。」の「タロウが」と「英語を」の位置を取り換えて「英語を太郎が勉強する。」としても意味は変わりません。ところが英語の場合、Taro studies English. の Taro と English の位置を取り換えて English studies Taro. とすると意味が変わってしまいます（この場合には非常に非現実的な意味になります）。

太郎が英語を勉強する。= 英語を太郎が勉強する。

Taro studies English. ≠ English studies Taro.

このように英語のセンテンスでの言葉の機能は置かれる「位置」で決まるのであって言葉の「かたち」で必ずしも決まるのではないのです。この「位置」感覚を無意識レベルにまでしっかりとすり込むことが、私たち日本人英語学習者にとって最も重要な学習課題です。

Predicate

Subject が英語センテンスの主役だとすると Predicate（述部/述語）は主役とペアを組むメインパートナーです。Subject と Predicate が揃ってはじめて英語のセンテンスが成り立ちます。

Predicate が示すものは Subject に関する情報（属性）のときもあれば Subject とは別の何かとの関係を示す情報（二項関係）のときもあります。こうした思考のあり方の違いがセンテンスのパターン（文型）の違いを生み出します。

Modifier

Modifier(修飾部、補足部)は、「補足情報」を示すものです。補足の対象となるのは S+P(VOC)とといったセンテンスの各構成要素のこともあり、センテンス全体のこともあります。

センテンスとはひとつの思考内容をパッケージ化して言語表現化したものです。その際にあまりにも情報量が少ないと読み手は書き手が何を述べたいのかを明確につかむことができません。

ここに Ms. Tanaka saw a woman. という S+P(VO)のセンテンスがあるとしましょう。

Ms. Tanaka saw a woman.

（田中さんは、一人の女性を見かけた。）

たったこれだけの情報では読み手としては困ってしまいます。Ms. Tanaka についての補足情報がほしいところですし、彼女がいつどこでその woman を見かけたのかといった補足情報もほしいものです。

そこでこうした情報を Modifier として付加すると、例えば次のようなセンテンスになります。

When Ms. Tanaka, who lives in the city of Kichijoji, walked with her dog at Inokashira Park, she saw a gray-haired woman aged around fifty jogging very slowly.

(吉祥寺に住んでいる田中さんは、愛犬といっしょに井の頭公園を散歩しているときに、白髪交じりの 50 歳ぐらいの女性がゆっくりと走っているところを見かけた。)

これだけの補足情報が揃えば読み手としてもその情景をクリアに思い浮かべることができるでしょう。樹木では幹以外にも枝葉もなければ樹木としては不十分であるように、英語センテンスでは Subject と Predicate のほかに Modifier もなければセンテンスとして不十分なのです。

Connector

英文をつくるうえで Subject、Predicate、Modifier に加えて、実はもうひとつ、とても重要な構成要素があります。それが Connector (接続部) です。

Connector (接続部) とは、ふたつの「思考のまとまりのあいだの関係性」を示すものです。S+P(VO)における Verb とは S と O というふたつの「実体」(名詞)のあいだの関係性を示すものですが、接続部とはその(関係性という)認識を「思考のまとまり」のあいだにまで延長したものだと考えてください。

Connector (接続部) が示す具体的な「思考のまとまりのあいだの関係性」には、「理由」「時間」「条件」「譲歩」「様態」といったものがあります。Connector の数は、狭義のもので 50 数個あり、広義のものを含めると 300 以上あります。以下ではその一部を紹介しておきます。

○理由 : because, since, so that, in order (that)、○時間 : after, as long as, as soon as, before, by the time, now that, once, since, till, until, when, whenever, while、○譲歩 : though, although, even though, while、○条件 : if, only if, unless, until, provided that, assuming that, even if, in case (that), lest、○様態 : as though, as if、○比較 : rather than, whether, as much as, whereas、○関係代名詞 : that, what, whatever, which, whichever、○関係形容詞 : who, whoever, whom, whomever, whose, where, wherever、○相関 : as ... as, just as ... so, both ... and, hardly ... when, scarcely ... when, either ... or, neither ... or, if ... then, not ... but, what with ... and (what with), whether ... or, not only ... but

also, no sooner ... than, rather ... than、○等位接続 : for, and, nor, but, or, yet, so

これらの表現をうまく使いこなすことができると英語ライティングの幅が大きく広がります。

☆☆☆

【演習問題】

例にならったかたちで、それぞれの英語センテンスの「SPMC」分析をおこなってください。

(例 1)

Writing provides pleasure.

↓

Writing (S)

provides pleasure (P)

(例 2)

Originating nearly 3,000 years ago, Hinduism is the world's third largest religion with approximately 900 million spanning from East to West.³

↓

Originating nearly 3,000 years ago, (M)

Hinduism (S)

is the world's third largest religion (P)

with approximately 900 million (M)

spanning from East to West (M)

(例 3)

Although the United States experienced continued growth and robust job creation, the global economy in 2015 had unexpectedly low growth across many regions relative to expectations and even relative to the more-subdued growth seen in

³ *The Knowledge book*, National Geographic より

recent years.

↓

Although (C)

the United States (S)

experienced continued growth and robust job creation, (P)

the global economy in 2015 (S)

had unexpectedly low growth across many regions (P)

relative to expectations (m)

and even

relative to the more-subdued growth (m)

seen in recent years (m)

(問題)

1.

Assets increased by \$12 million from the first quarter of 2012 to the third quarter of 2012.

2.

The car was upside down, with its wheels still turning.

3.

The Bordeaux wine prices shot up due to the limited quantity and high demand, making for a lively futures market.

4.

Globally auto sales data remains sluggish at best and industrial PMI indicators have on the whole further weakened.

5.

Software developers are seeing an earnings recovery in fiscal 2010, with 12 of 14 listed firms expecting higher pretax profits and one software house hoping to move out of the red.

6.

A great discovery is imminent that will change the course of world history and the

very foundations of our understanding of ourselves and our place in the scheme of things.

7.

Then I saw the dark muzzle and the shadow of horns, and then, with a clattering on the wood in the hollow box, the bull charged and came out into the corral, skidding with his forefeet in the straw as he stopped, his head up, the great hump of muscle on his neck swollen tight, his body muscles quivering as he looked up at the crowd on the stone walls.

8.

Nineteen years old, six feet two inches tall, long of bones and hard of muscle, with sunburned faces and auburn hair, their eyes merry and arrogant, their bodies clothed in identical blue coats and mustard-colored breeches, they were as much alike as two bolls of cotton.

9

Although there are some values in breaking down barriers, the real barriers to break down were those between the three major divisions of education, the elementary, secondary, and university level, each of which tends to become a self-endorsed system, congratulating itself on its virtues and blaming whatever deficiencies the educational process as whole may have on the other systems.

10.

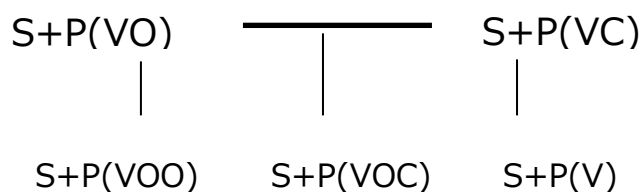
Apart from the greatly enlarged sphere of activity that the English language thus acquired and the increased opportunity for local variation that has naturally resulted, the most obvious effects of English expansion are to be seen in the vocabulary.

センテンスパターン（文型）

【要約】

- 学校文法の「基本 5 文型」という考え方は、イギリスの Charles Onions という英語学者が考案したものが、日本の英語教育に持ち込まれたものである。それ以外にも、さまざまな文型論がある。
- 本論では成瀬が考案した「基本 2 文型プラス派生 3 文型」をベースに論を進める。英語における「心の働き」を理解して運用するためには「基本 2 文型プラス派生 3 文型」が最良だと考える。
- Predicate の最も一般的な「心の働き」は、Subject と別のもの（Object）との「関係性」を示すことである。この関係性をあらわす文型が「Subject（主部）＋Predicate Verb（述部動詞）＋Object（目的部）」、つまり S+P(VO) である。
- S+P(VC) は、S というひとつの存在の「属性」（Attribute）を示すものである。S+P(VO) のように、ふたつの存在のあいだの関係性を示すものではない。
- 対象となる存在が Subject か（これが S+P(VC)）、それとも Subject とは別の何らかの存在との二項対立のかたちをとるか（これが S+P(VO)）——この違いこそが S+P(VC) と S+P(VO) との本質的な違いである。
- S+P(VOO) は、S+P(VO) の二項対立の認識から派生した構文のひとつである。S+P(VOO) では Subject と Object というふたつの実体のほかに、もうひとつの実体（通常は人間）が登場する。
- S+P(V) は、Predicate（Verb のみ）が Subject の属性を表す。すなわち S+P(VC) と S+P(V) の「心の働き」は同じものである。
- S+P(VOC) は、S+P(VO) と S+P(VC) との複合形であり、Predicate のなかにもうひとつの二項関係が埋め込まれている。

英語の基本文型（基本 2 文型＋派生 3 文型）



☆☆☆

ここからは「言葉の機能」にかかわる文法概念ではなく、「言葉のかたち」にかかわる文法概念である、Words（語）、Phrase（句）、Clause（節）について説明します。

なお一般的な英語文法には、「言葉の機能」にかかわる文法概念と「言葉のかたち」にかかわる文法概念が混在しています。すでに説明したように、日本語の世界では「言葉の機能」と「言葉のかたち」は一体化しているため、多くの日本人は「機能」と「かたち」の文法概念の本質的な違いに気がついていません。このことが、「英文法はわからない」「英文法は難しい」という感覚を生み出している元凶のひとつです。

基本 2 文型プラス派生 3 文型

Predicate の内容をさらに詳しく調べると、Predicative Verb（述部動詞）と、その付属部から構成されていることがわかります。

いまから 100 年ほど前にイギリスの Charles Onions という英語学者が、その付属部を機能の違いによって分類して Five Basic Sentence Pattern（基本 5 文型）という概念をつくり出しました。

Onions は

1. V のみ = S+P(V)
2. V と C の組み合わせ = S+P(VC)
3. V と O の組み合わせ = S+P(VO)
4. V とふたつの O の組み合わせ = S+P(VOO)
5. V と O と C の組み合わせ = S+P(VOC)

という 5 つのパターンに Predicate が整理できると考えたのです。この Onions の考え方を踏襲したのが日本で教えられてきた「基本 5 文型」という考え方です。

そのほかにも、さまざまな英文法研究者がさまざまな持論を述べ立てています。5 文型では足りないの
で 7 文型がよい、8 文型がよい、いや 25 文型がよい、などなどです。

本論では成瀬が考案した「基本 2 文型プラス派生 3 文型」をベースに論を進めます。英語における「心の働き」を理解して運用するためには「基本 2 文型プラス派生 3 文型」が最良と考えるからです。

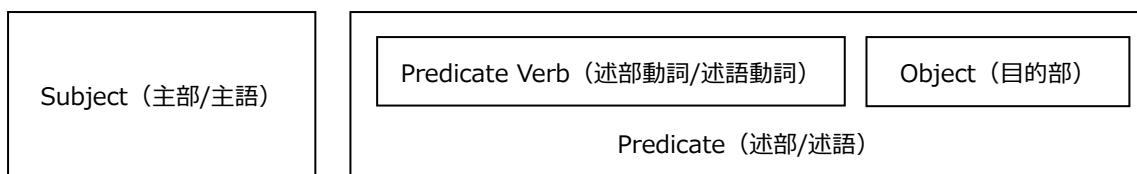
S+P(VO)

Predicate の最も一般的な「心の働き」は、Subject と別の実体（Object）との「関係性」を示すことです。Subject が別の実体（Object）に対して何かの影響を与える、あるいは別の実態から何かの影響を与えられるといった関係性です。

このようなふたつの存在のあいだの関係性をあらわす文型が、「Subject（主部） + Predicate

Verb（述部動詞/述語動詞） + Object（目的部）」、つまり S+P(VO)です。

S+P(VO)



英語の世界では、ふたつの存在のあいだの関係性をまず把握することが世界認識の基盤となっています。S+P(VO)は、そうした英語の基本的な世界認識を表すものです。

それに対して（伝統的な）日本語の世界は、英語の世界のような「二項対立」「自他の関係性」「汝と我」を基盤とする世界認識を基本的に持っていません。

私たち日本人が持っている（伝統的な）世界認識は、「場」のなかで生じる「こと」を中心に置くものです。ふたつの存在を抽出してその関係性を理解するといった英語の世界認識は（伝統的な）日本語の考え方とは異なるものです。

ただし近代日本人の思考はすでにかかなりの部分で西欧人的になっていますから、英語的な世界認識も理解することができますし、あるいはそうした英語的な世界認識のほうがすでに主流になっているのかもしれない。とはいえ、数千年の蓄積のある伝統的な日本的な世界観や世界認識、私たちのなかに深く根づいていますので、その影響から私たちは逃れることはできません（逃れる必要もありません）。

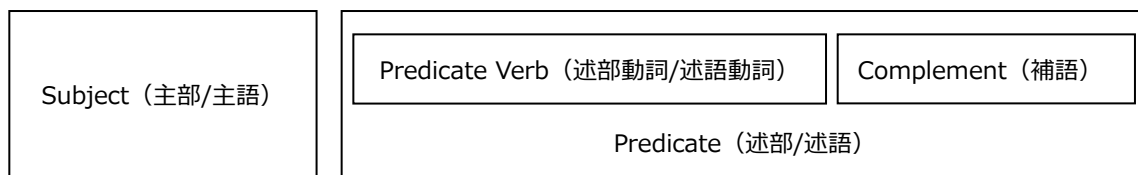
そのため、日本人は英語的な S+P(VO)の認識でものを考えることが得意ではないのです。ゆえに、英語センテンスをつくる際にも S+P(VO)のかたちをなかなかうまく使いこなせません。

その限界を打破して S+P(VO)をうまく使いこなせるようになることが、私たち日本人にとっての英語センテンスづくりの第一歩といえます。

S+P(VC)

S+P(VO)とともに双壁をなす文型が、「Subject（主部） + Predicate Verb（述部動詞/述語動詞） + Complement（補足部）」、つまり S+P(VC)です。

S+P(VC)



S+P(VC)は、Subject というひとつの存在の「属性」(Attribute) を示すものです。すなわち、S+P(VO)のように、ふたつの存在のあいだの関係性を示すものではありません。ここが、大事です。

S+P(VC)で用いられる述部動詞は、「連結動詞」(Linking verb) または「コピュラ」(Copula) と呼ばれます。

S+P(VC)での代表的な連結動詞は be 動詞ですが、be 動詞以外にも feel, look, smell, sound, taste, remain, keep, stay, become, get, go, grow などが使われます。これらの語は、意味的に無色透明である be 動詞になにかしらの付加的意味（見え方、聞こえ方など）を付け加えたものです。

対象となる存在が Subject だけなのか（これが S+P(VC)）、それとも Subject とは別の何らかの存在との二項対立のかたちをとるか（これが S+P(VO)）——この違いこそが、S+P(VC)と S+P(VO)との本質的な違いです。

ここまでで説明してきた S と O の関係性を示す S+P(VO)と、C が S の属性を示す S+P(VC)とが、英語の文型における基本中の基本です。ゆえに、これを「基本 2 文型」と呼びます。⁴

S+P(V)、S+P(VOO)、S+P(VOC)

学校英文法では、上に述べた S+P(VO)と S+P(VC)のほかに S+P(V)、S+P(VOO)、S+P(VOC)というかたちを設定しています。これらを S+P(VO)と S+P(VC)とあわせて「基本 5 文型」と呼んでいます。

しかし、本論ではそのような見方をとりません。英文を書くうえで最も大事なことは英語での世界認識のあり方を理解して、その認識のもとに言葉を組み立ていくことです。言葉としてのかたちではなく人間の「心の働き」が先にくるのです。

英語での「心の働き」の基本となっているのが、S+P(VO)という複数の存在間の関係性の表明であ

⁴ P(VO)が示す関係性もまた S の属性の一種であると捉えることも可能である。だがそうした捉え方をしても英語学習における新たな実践的価値は生まれないと「心と言葉のグローバル英語文法」では判断している。

り、そして S+P(VC)というひとつの存在とその属性の表明です。従って本論では、このふたつの文型の現れる心の動きを英語ライティングの基本とします。

S+P(V)、S+P(VOO)、S+P(VOC)については、S+P(VO)と S+P(VC)というふたつの基本文型からの派生文型だと捉えます。ここからは簡単に S+P(V)、S+P(VOO)、S+P(VOC)について説明します。

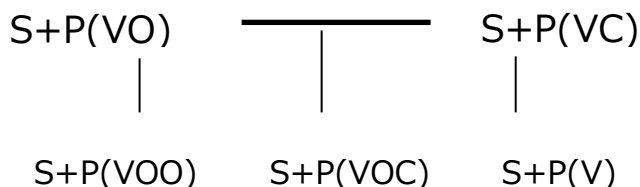
○S+P(VOO)——S+P(VO)の二項対立の認識から派生した構文のひとつです。S+P(VOO)では Subject と Object というふたつの実体のほかに、もうひとつの実体（通常は人間）が登場します。S+P(VOO)をとる述部動詞は授与／与格動詞と呼ばれるものに限定されています。

○S+P(V)——この構文の Predicate には Complement がついていませんが、S+P(VC)と同様に、Predicate (Verb のみ) が Subject の属性を表します。すなわち S+P(VC)と S+P(V)の「心の働き」は同じものです。別の観点からみると、この構文は S+P(VO)の Object が Subject を示す再帰代名詞 (oneself) であり、それが省略されたものと考えることができます。つまり自分が自分自身に影響を与えるイコール「属性」というわけです。

○S+P(VOC)——S+P(VO)と S+P(VC)との複合形です。Predicate のなかにもうひとつの二項関係が埋め込まれているかたちです。

以上をまとめると、次の図になります。これが本論での英語の基本文型（基本 2 文型 + 派生 3 文型）です。

英語の基本文型（基本 2 文型 + 派生 3 文型）



☆☆☆

【演習問題】

以下の英語センテンスを、それぞれの指示にしたがって書き換えてください。

1.

She is a teacher of English.

(S+P(VO)構文に書き換え)

2.

He runs fast.

(S+P(VC)構文に書き換え)

3.

His father bought a tablet PC for him.

(S+P(VOC)構文に書き換え)

4.

We regard him. + He is a good man.

(S+P(VOC)構文に書き換え)

5.

Would you find my glasses for me?

(S+P(VOC)構文に書き換え)

6.

She found her dog. + He was still asleep.

(S+P(VOC)構文に書き換え)

7.

If you are with us, we are very happy.

(S+P(VOC)構文に書き換え)

8.

They walk.

(S+P(VC)に書き換え)

9.

It is great.

(be 動詞を他の動詞に置き換え)

「言葉のかたち」としての Words（語）、Phrase（句）、Clause（節）

【要約】

- 「心の働き（機能）」の概念である Subject、Predicate、Modifier は、実際に表現される場合には、Words（語）、Phrase（句）、Clause（節）という「言葉のかたち」で表現される。
- Words（語）とは語または語のグループのことである。Words は Subject、Predicate、Modifier のどこにでも用いられる。
- Phrase（句）は Clause（節）の「簡易版」である。Clause は Subject と Predicate の両方が揃っている「思考の単位（まとまり）」だが、Phrase は Subject や be 動詞については省略してしまう。Phrase も Subject、Predicate、Modifier のどこにでも用いられる。
- Clause（節）は、Subject（主部）と Predicate（述部）の両方が揃っている「思考の単位（まとまり）」のかたちである。Clause（節）も Subject、Predicate、Modifier のどこにでも用いられる。
- Words、Phrase、Clause のいずれのかたちを使っても、同じ内容の認識・思考を表現することができる。
- Words、Phrase、Clause のいずれで表現するのかは、述べたい内容の違いで決まるのではなく、文体をどのようにするのかで決まる。
- 述べたい内容は同じでも「言葉のかたち」としてはさまざまに表現できるという事実は、英語に限らず、あらゆる言語での文章づくりでの最大のポイントのひとつである。

☆☆☆